

玉井

観世小次郎作

前

ワキ 彦火々出見尊

シテ 豊玉姫

ツレ 玉依姫

後

ツレ二人 天女

シテ 綿津見の宮主

地は 龍宮

季は 雑

ワキサシ

「それ天地開け始まりしより。天神七代地神四代に至り。火々出見尊とは我事なり。

詞

「さても兄火闌降命の釣針を。かりそめながら海辺に釣を垂れしに。彼釣針を魚に取られぬ。此由を兄命に申せども。唯もとの針を返せと宣ふ間。剣をくづし針に作りて返すといへども。猶もとの鉤をはたる。さらば海中に入り。彼釣針を尋ねんと思ひ立ちて候。わたづみのそことも知らぬ塩土男

歌

の。翁の教へに従ひて。無目籠の猛き心。

「直なる道を行く如く。く。波路遥かに隔て来て。

こゝぞ名におふわたづみの。都と知れば水もなく。

広き真砂に着きにけり。く。

詞

「さても我塩土男の翁が教へに従ひ。わたづみの都に入りぬ。これに瑠璃の瓦を敷ける衡門あり。門前に玉の井あり。此井の有様銀色かゝやき世の常ならず。又ゆつの桂の木あり。木の下に立ち寄り。

暫く事のよしをも窺はゞやと思ひ候。

シテ、ツレ一声

「はかりなき。 齡を延ぶる明暮の。 長き月日の光り
かな。

ツレ 「いとなむ業も手ずさみに。

二人 「結ぶも清き水ならん。

シテサシ

「濁りなき心の水の泉まで。 老いせぬ齡を汲みて知
る。

二人

「薬の水の故なれや。 老いせぬ門に出で入るや。 月

日曇らぬ久堅の。 天にもますや此国の。 行末遠き
住居かな。

下歌

「くり返す。 玉の釣瓶の掛縄の。

上歌

「長き命を汲みて知る。 く。 心の底も曇りなき。

月の桂の光り添ふ。 枝を連ねて諸共に。 朝夕なるゝ
玉の井の。 深き契は頼もしや。 く。

ワキ詞

「我玉の井の辺にたゞずむ処に。 其様けたかき女性
二人来り。 玉の釣瓶を持ち水を汲む気色見えた

り。言葉をかけんも如何なれば。是なる桂の木陰に立ちより。身を隠しつゝたゞすみたり。

シテ詞

「人ありとだに白露の。玉の釣瓶を沈めんと。玉の井に立ち寄り底を見れば。桂の木陰に人見えたり。是は如何なる人やらん。

ワキ

「忍ぶ姿も顯はれて。あさまになりぬさりながら。なべてならざる御姿。如何なる人にてましますぞ。

シテ

「あら恥かしや我姿の。見えける事も我ながら。忘

るゝ程の御気色。形も殊にみやびやかなり。唯人ならず見奉る。御名を名乗りおはしませ。

ワキ

「今は何をか包むべき。我は天孫地神四代。火々出見尊とは我事なり。

ツレ

「あら有難や天の御神の。御孫の尊を目のあたり。見奉るぞ不思議なる。

シテ詞

「いやさればこそ始より。天孫の光り隠れなし。さて是までの臨幸は。そも何事の故やらん。

ワキ 「実に御不審は御理。我釣針を魚に取られ。遙々是まで尋ね来る。こゝをば何処と申すやらん。委しく語り給ふべし。

シテ詞 「知ろしめさぬは御理。是は龍宮わたづみの宮。

ワキ 「かく言の葉をかはし給ふ。二人の御名は。

シテ 「豊玉姫。

ツレ 「我は妹の玉依姫。

地 「互に連枝の名乗りして。つゝましながら御神の。

みやびやかなるに。早打ち解けて木綿四手の。神にぞ靡く大麻の。引く手あまたの心かな。く。

シテ詞 「如何に申し上げ候。うちつけなる御事なれども。

やがて父母に逢はせ奉り。彼釣針をも尋ぬべし御心安く思し召され候へ。

ワキ詞 「さらばやがて伴なひ申し。宮中へ参り候ふべし。

地クリ 「かたじけなくも天の御神の御孫。わたづみの都に至り給ふ事。有難かりける御影かな。

シテサシ

「然れば高垣姫垣調ほり。

地

「高殿屋照りかゝやき。雲の八重畳を敷き。尊を請

じ入れ奉り。

シテ

「父母の神いつきかしづき。

地

「臨幸の意趣を語り給ふ。

クセ

「我兄の釣針を。かりそめながら波間行く。魚に取られて無き由を。歎き給へど其針に。あらずは取らじと兎に角に。せうとを痛めさまぐに。猛き

心の如何ならんと。語り給へば父の神。御心安く
思し召せ。まづ釣針を尋ねつゝ。御国に歸し申す
べし。

シテ

「猶兄の怒りあらば。

地

「潮満潮干の二つの玉を。尊に奉りなば御心に。任せて国も久堅の。天より降る御神の。外祖となりて豊姫も。たゞならぬ姿有明の。月日程なく。三年を送り給へり。

ワキ詞

「かくて三年になりぬれば。我国に帰り上るべし。
海路の案内如何ならん。

シテ詞

「御心安く思し召せ。綿津見の宮主伴なひて。海中
の乗物さまざまあり。

地

「大鰐に乗じはやてを吹かせ。陸地に送りつけ申さ
ん。其程は待たせおはしませ。（中入）

天女二人

「光り散る。潮満玉のおのづから。曇らぬ御影仰ぐ
なり。

地

「各玉を捧げつゝ。く。豊姫玉依二人の姫宮。金
銀碗裏に玉を供へ。尊に捧げ奉り。彼釣針を待ち
給ふ。綿津見の宮主持参せよ。

後ジテ

「まうとの君の命に随ひ。綿津見の宮主釣針を尋ね
て。天孫の御前に奉る。

地

「潮満潮干二つの玉を。く。釣針に取り添へ捧げ
申し。舞楽を奏し豊姫玉依。袖を返して舞ひ給ふ。

（天女二人の舞）

地「いづれも妙なる舞の袖。く。玉のかんざし桂の

黛。月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす袂かな。

シテ「わたづみの宮主。く。

地「姿は老龍の雲に蟠り。鹿脊杖にすぎり。左右に返

す袂も花やかに。足踏はとうくと。拍子をそろ

へて時移れば。尊は御座を立ち給ひ。帰り給へば

袂にすぎり。わたづみの乗物を奉らんと。五丈の

鰐に乗せ奉り。二人の姫に玉を持たせ。龍王立ち

来る波を払ひ。潮を蹴立て。遥かに送りつけ奉り。

遥かに送りつけ奉りて。又龍宮にぞ帰りける。